

2-30-2 浄土宗 大本山 増上寺

沿革

浄土宗の七大本山の一つ。三縁山広度院増上寺が正式の呼称である。

開山は明徳4年(1393)、浄土宗第8祖 西誉聖聡上人によって、江戸貝塚(現在の千代田区紀尾井町)の地に浄土宗正統根本念仏道場として創建され、慶長3年(1598)に現在の地に移転した。

文明2年(1470)には勅願所に任ぜられるなど、関東における浄土宗教学の殿堂として宗門の発展に寄与し大きく発展してきた。

江戸時代初期、増上寺法主12世 源誉存応上人、後の「観智国師」は徳川家康公から深く帰依を受け、手厚い保護もあり増上寺は大隆盛へと向かって行った。

徳川将軍家の菩提寺として、また関東十八檀林の筆頭として興隆し、浄土宗の統制機関となった。

その大きさは、寺領10,000石余、20数万坪の境内地、山内寺院48宇、学寮100数十軒、常時3,000名の僧侶が修学する大寺院であった。

現代でも浄土宗大本山として格式を保ち、宗教活動の他文化活動も幅広く行なわれ、建造物、古文書、経典など多数の重要文化財を保管している。

説明板より